

島根県那賀郡金城町内
遺跡分布調査報告書Ⅰ

—波佐・長田地区—

1986年3月

育委員会

序 文

金城町教育委員会は、文化庁の補助事業として昭和60年度から2年間で「埋蔵文化財分布調査」を実施することになり、第1年度は中世城郭で大規模な畝形阻塞を有する波佐一本松城跡を中心とする波佐地区一円の埋蔵文化財分布調査を実施しました。

この調査中、たまたま調査地区内で多数の土器片が出土しましたので、長田郷遺跡と名付けてこれを整理し、本報告書に併せて収録いたしました。

この報告書が埋蔵文化財の資料として各方面に利用されることを期待するとともに、今後一層充実した文化財保護活動を進めて行きたいと思います。

この調査並びに本書の刊行にあたって、ご指導ご協力をいただきました関係者の方々に対して、深く感謝しお礼申しあげます。

昭和 61 年 3 月

金城町教育委員会

教育長 水崎 齊

例　　言

1. 本書は、昭和60年度、国および県の補助を受けて島根県那賀郡金城町が実施した町内遺跡分布調査の報告書である。
2. 本年度の遺跡分布調査は、金城町波佐・長田地区を対象とした。他の地区については、昭和61年度において実施する予定である。
3. 本年度調査した遺跡の台帳は、金城町教育委員会に保管している。
4. 調査の事業主体および体制はつぎのとおりである。

事業主体	金城町			
事務局	金城町教育委員会教育次長 金城町教育委員会社会教主事		服部謙治 河野丈影	
調査指導	奈良女子大学文学部助教授 島根大学法文学部教授 島根県教育委員会文化課課長補佐		村田修三 田中義昭 蓮岡法暉	
	島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長		永塚太郎	
	島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係主事		西尾克己	
調査員	金城町史学研究会副会長 金城町文化財保護審議委員		上田房一 隅田正三	
	西中国山地民具を守る会事務局長		岡本利道	
	島根大学法文学部学生		伊田喜浩	
協力者	西中国山地民具を守る会			
	一町仁市(会長)　上山均(副会長) 関本益夫　佐田達雄　上山信人　隅田哲夫　加納昭則		古田安五郎 岩田正喜　西林寅夫　小林忠雄　古城満秀　古田浩吉	

5. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の関係者、金城町文化財保護審議委員の方々にいろいろと指導、ご協力をいただいた。又、柳浦俊一(島根県教育文化財団)、原俊二(國學院大学学生)には助力をいただいた。
6. 本書中の「波佐一本松城の特徴」は、村田修三氏の執筆による。
7. 本書で使用した地図(一部)は国土地理院の複製承認を得たものである。
8. 11Pで使用した航空写真は国際航業(株)の提供にかかるものである。
9. 本書は、調査員が協議して編集した。執筆者は文末に記す。

目 次

序文（教育長 水崎 齊）

例 言

波佐・長田地区遺跡分布調査集成.....	1
1. 波佐一本松城調査概報.....	11
2. 長田郷遺跡調査概報.....	23
結 語.....	32

図・表・写真図版等目次

遺跡分布調査区域図.....	1
波佐・長田地区遺跡分布図.....	2
金城町内遺跡所在地一覧（波佐・長田地区）.....	8
波佐一本松城跡・長田郷遺跡航空写真.....	11
波佐一本松城略図.....	15
波佐一本松城測量図.....	16
長田郷遺跡区域図.....	24
長田郷遺跡断面図.....	25
長田郷遺跡出土上縄文土器実測図.....	26
長田郷遺跡出土弥生土器実測図.....	27
長田郷遺跡出土土器・陶磁器・石器・土鏡実測図.....	28
長田郷遺跡出土土器一覧表.....	29
長田郷遺跡出土縄文土器・弥生土器.....	31
写真図版（長田郷遺跡その他）.....	33

金城町の位置



凡例

- | | |
|---|-------------|
| ▲ | 製鉄遺跡 |
| □ | 城跡 |
| ● | 古墳、古墓 |
| ○ | 集落跡 |
| ● | 遺物散布地 |
| ◎ | 寺院跡及びその他の遺跡 |



図1 遺跡分布調査区域図

波佐 (1:25000)

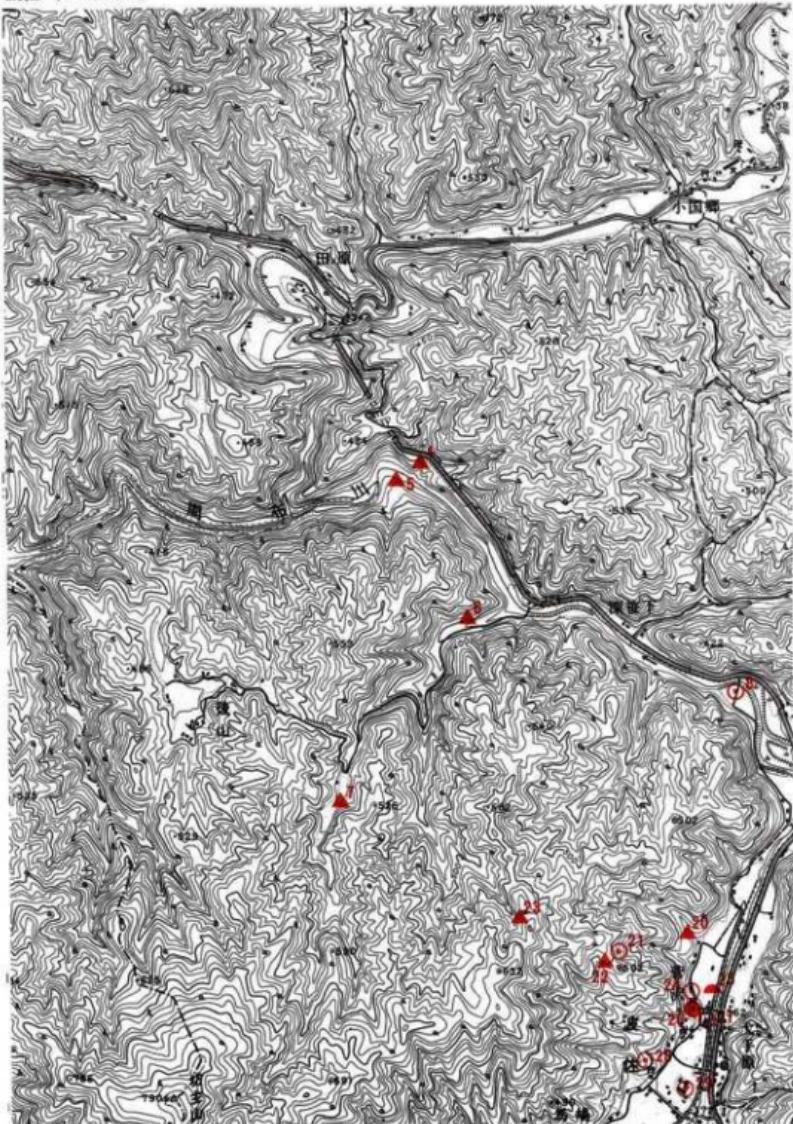
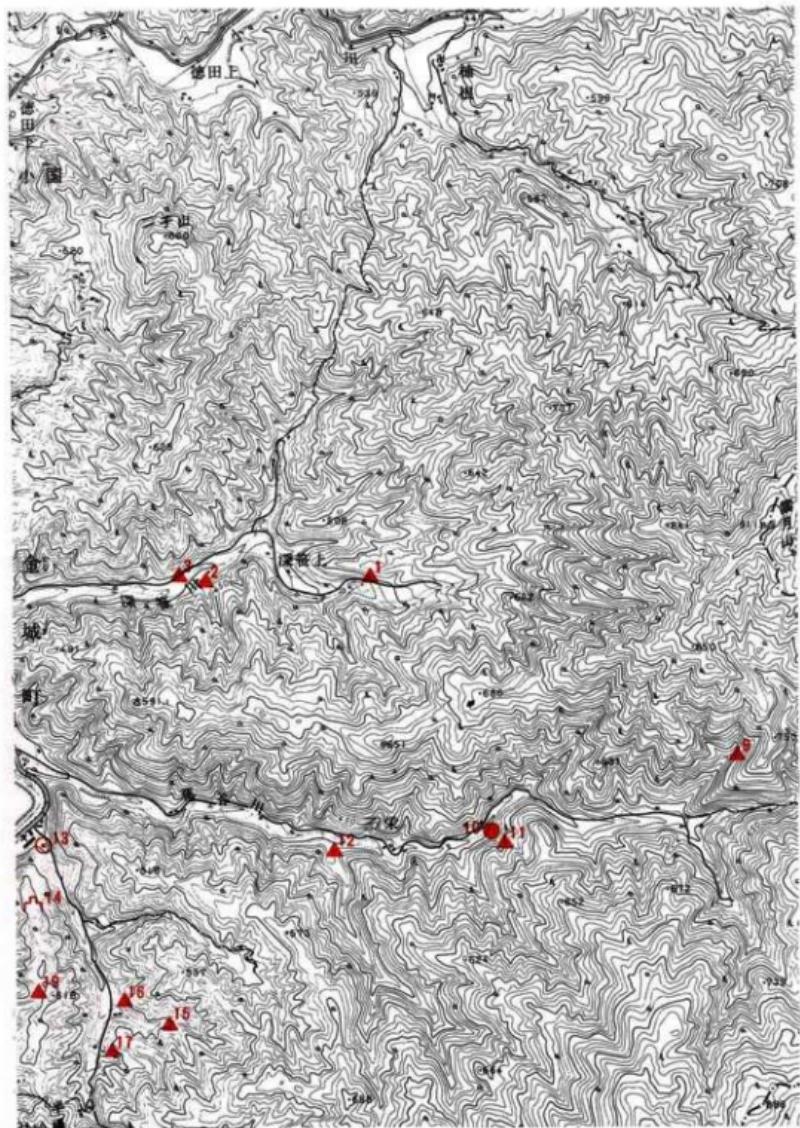


図 2-1 碓佐・長田地区遺跡分布図



波佐 (1:25000)

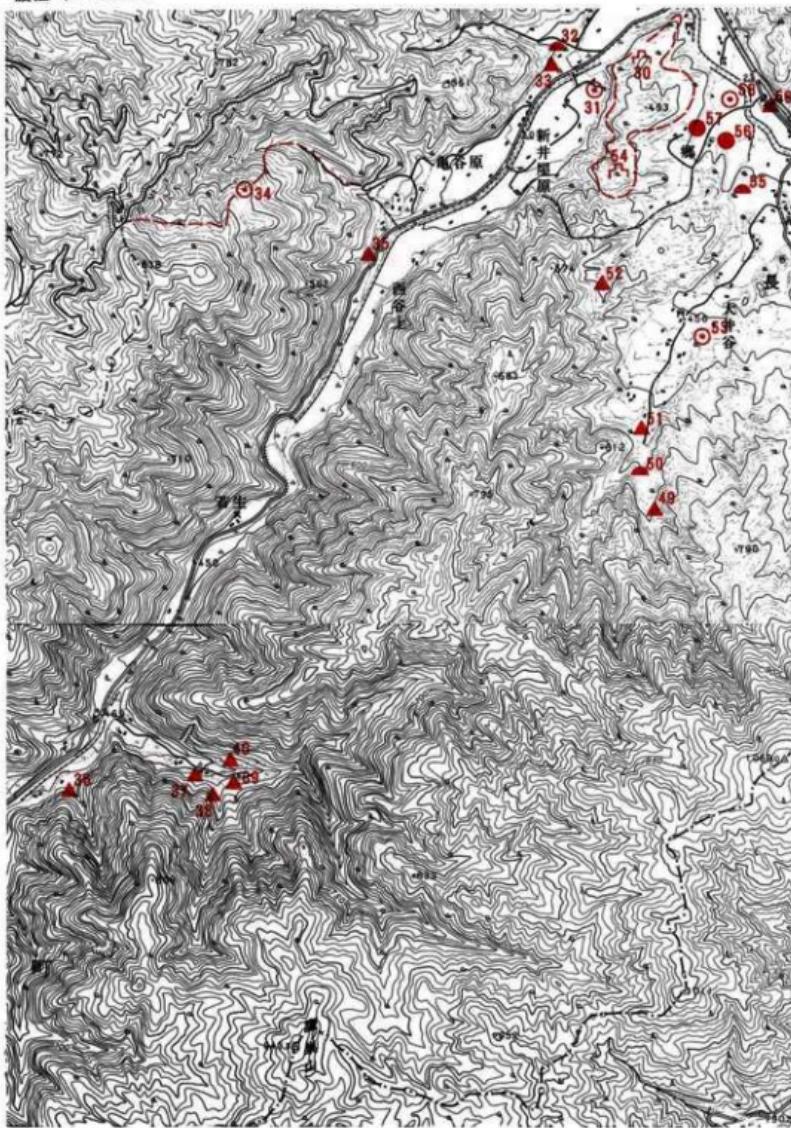
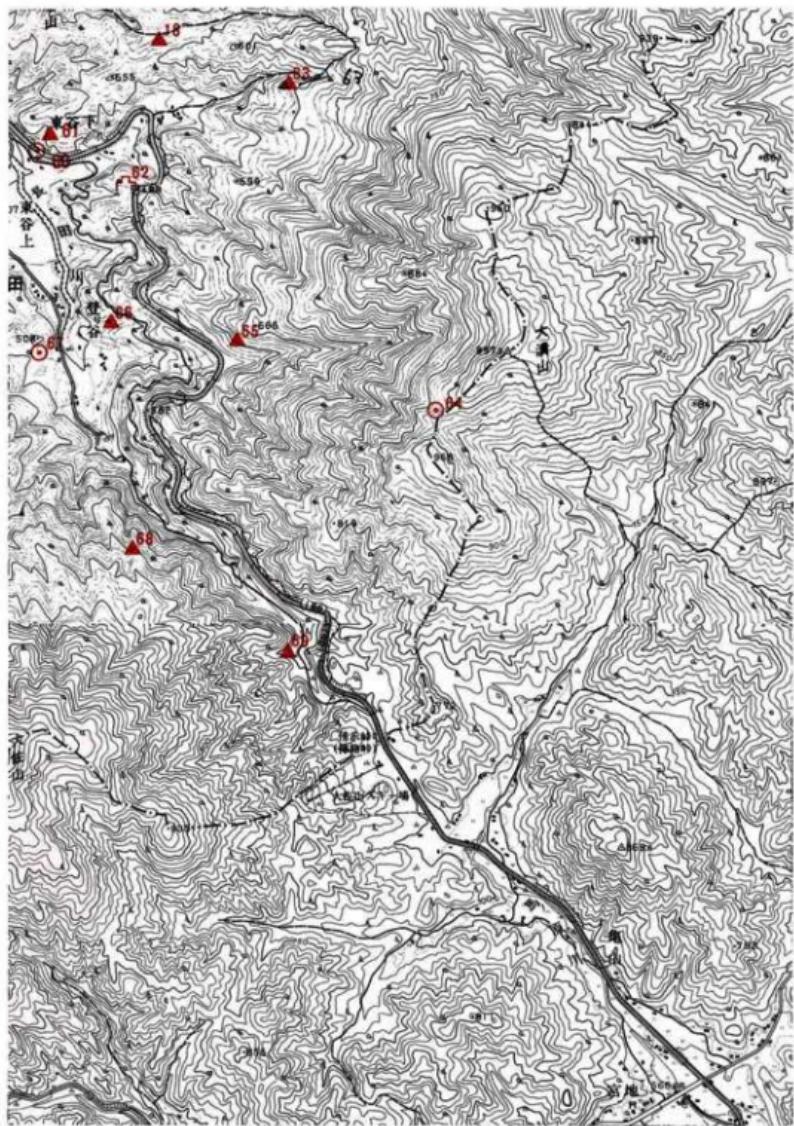


図 2-2 波佐・長田地区遺跡分布図



臥龍山・宇津川 (1:25000)

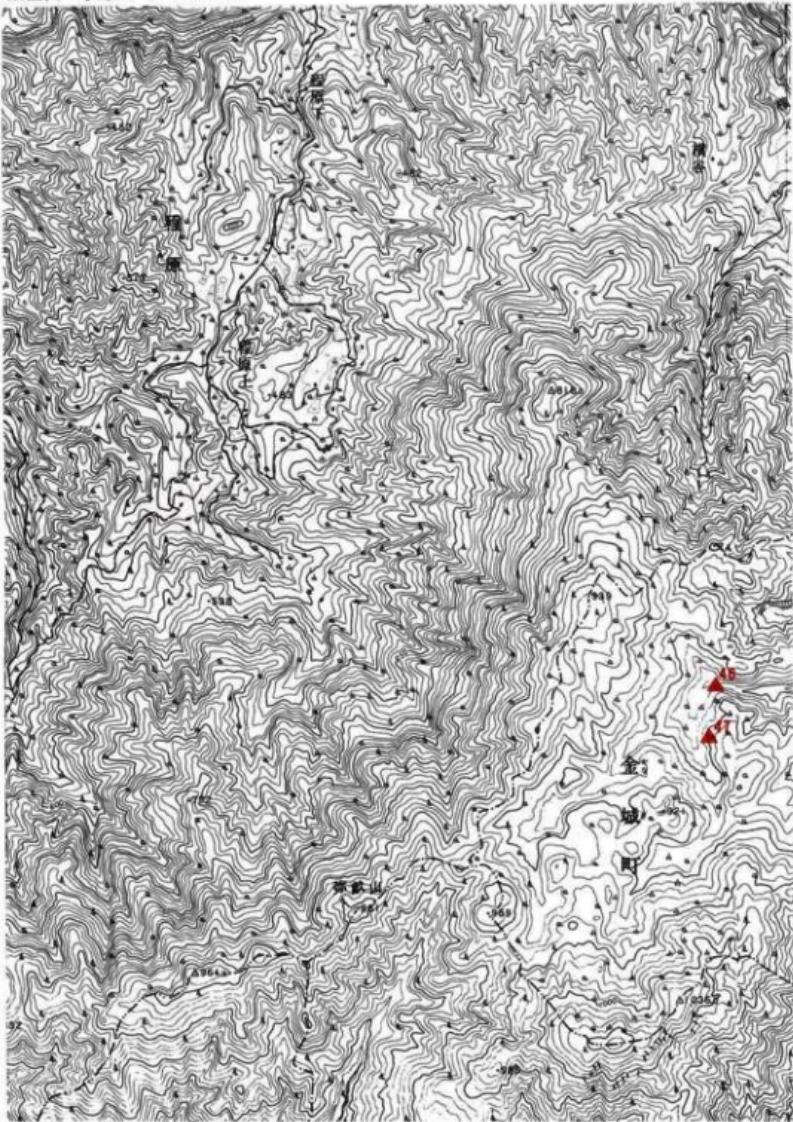


図2-3 波佐・長田地区遺跡分布図

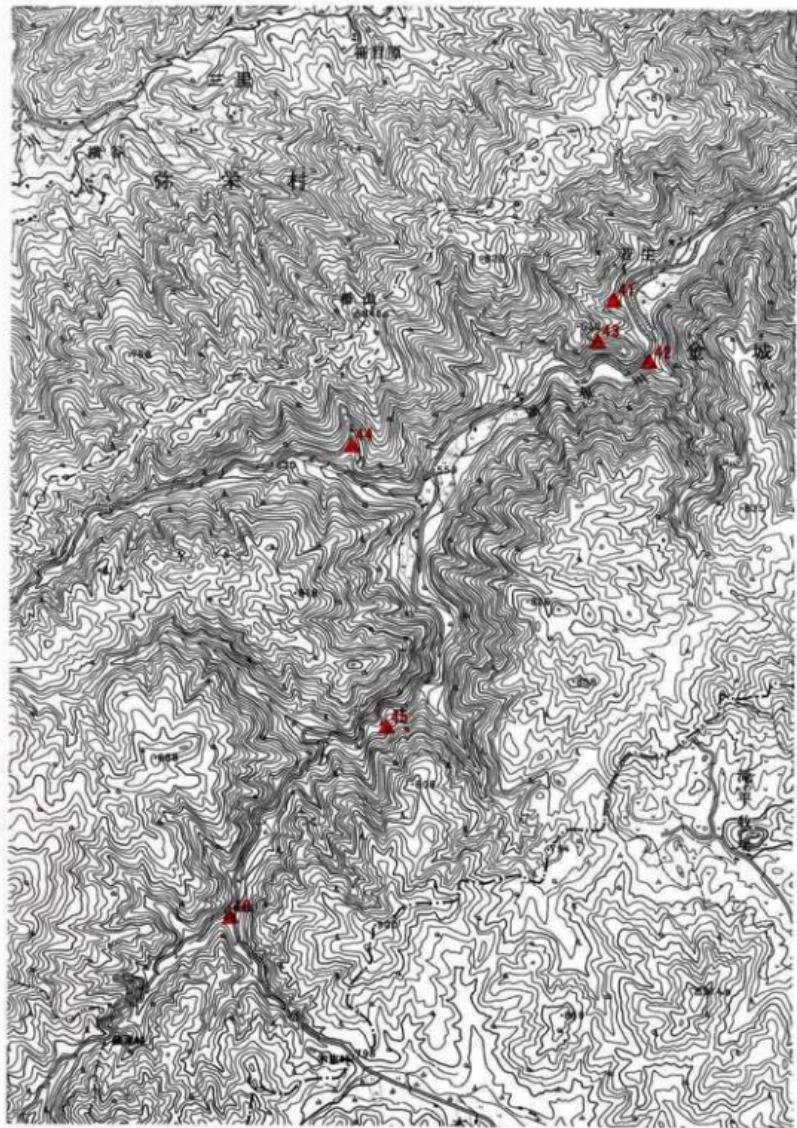


表1 金城町内遺跡所在地一覧表（波佐・長田地区）

番号	種別	遺跡名	所在地	現況 (地目)	遺跡の概況 (遺構、遺物)	切替番号
1	製鉄遺跡	深笠Ⅰ鉛	波佐字新子イ11	水田		イ1号
2	"	深笠Ⅱ鉛	波佐字釜ヶ原 イ44	水田		イ4号
3	"	深井 鍛冶屋跡	小国字下ヶ原 イ703	宅地		
4	"	夏焼薪	小国字夏焼	山林	鉄滓	
5	"	犬灰り鉛	波佐字新床山口 ロ108	山林	鉄滓。鉛跡現状保存。	ロ4号
6	"	長沢鉛	波佐字長澤イ250	原野	鉄滓	イ12号
7	"	藤尾鉛	波佐字新ヶ谷 イ1133	山林	鉄滓	イ26号
8	その他	不來ヶ原 越刑場	波佐字不來原 イ270	水田		イ13号
9	製鉄遺跡	小松木鉄穴	波佐字小松木 イ1104	山林	鉄穴水路跡 鉄穴場松圓面あり（明治7年）	イ13号
10	"	楓ヶ曾根鉛	波佐字大白イ谷 イ1111	原野	鉄滓	イ10号
11	遺物散布地	楓ヶ曾根 遺跡	波佐字大白イ谷 イ1111	原野	磨製石斧	イ10号
12	製鉄遺跡	黒瀬鉛	波佐字新床イ172	原野	鉄岸 鉛場略圓面あり（明治7年） 陶器片	イ9号
13	寺院跡	善長寺跡	波佐字寺床イ299	原野	五輪塔	イ15号
14	城跡	花城跡	波佐字誠山 イ1172	山林	元亀元年（1570年）落城する。 別名中谷城、姫ノ城ともいう。	イ15号
15	製鉄遺跡	漆谷鉄穴	波佐字鉄穴 イ1164	山林	鉄穴水路跡	イ18+ 19号
16	"	漆谷Ⅰ鉛	波佐字新ノ塙 イ331	原野	鉄滓	イ19号
17	"	漆谷Ⅱ鉛	波佐字矢倉町 イ333	水田	鉄滓	イ20号
18	"	夜無鉛	波佐字夜無イ351	山林	鉄滓	イ21号
19	"	地主鉄穴	波佐字手背ノ山 イ1179	山林	鉄穴水路跡	イ22号
20	"	桂迫鉛	波佐字石仏有ノ木 谷音沢イ1189	山林	鉄滓。古文書多數。 天保11年（1840年）開設。	イ25号
21	その他	大人遺跡	波佐字石仏ノ木 音沢イ1189-103	山林	足形を刻した巨石あり。	イ25号
22	製鉄遺跡	アンの木 鉄穴	波佐字有ノ木谷音 沢イ1189-61	山林		イ27号
23	"	鉛ヶ谷鉛	波佐字新ヶ谷 イ1133	山林	鉄滓	イ26号
24	その他	菅沢庄屋跡	波佐字菅沢 イ491	畠	庄屋敷跡（慶長2年・初代庄屋田 中善兵衛寅安）	イ25号
25	古墳	菅沢墳墓	波佐字冲ノ切尻 イ497	墓地	周囲に石垣を設けた8m×5mの台 状地あり。	イ25号

番号	種別	遺跡名	所在地	現況 (地目)	遺跡の概況 (遺構、遺物)	切図番号
26	遺物散布地	アンの木前遺跡	波佐字有の木前ノイ 切イ507	水田	須恵器	イ25号
27	その他	波佐代官所跡	波佐字恵裏多イ5	宅地	元和3年(1617年)波佐代官所開設。 波佐組7カ村3,000石。大明8年 (1788年)廃絶。 宝曆6年この屋敷を竹岡庄屋、文久 2年更に菅原舎庄屋(明治5年まで) となる。	イ27号
28	"	常磐山の的場	波佐字常磐山 イ1195	山林	波佐常磐山八幡宮の裏山にあり、28 mの矢道・あずちが遺存する。この的 場には、県指定天然記念物のアシオ スギがある。	イ28号
29	"	千代帽子遺跡	波佐字千代帽子 イ555	水田	波佐常磐山八幡宮の御神幸、御旅所 跡。	イ28号
30	城跡	波佐一本松城跡	波佐字城山イ1254	山林	畝状空堀群の特異な繩張りの山城。 建武3年(1336年)8月25日波佐内戦。 (萩園第3巻P594陶布吉兵衛文書)	イ40号
31	古墓	劍の墓	波佐字王子ノ口 イ1261	原野	波佐合戦の戦死者の遺品を納めた墓 と伝う。	イ40号
32	"	千人塚	波佐字谷川イ664	原野	波佐合戦の戦死者を納葬したと伝う。	イ34号
33	製鉄遺跡	釜町新	波佐字釜町 イ678-2	雜種地	鉄津	イ34号
34	その他	笠松峠の石畳路	波佐字立添エ イ1231	山林	町指定史跡。文化8年9月完成。石 盤1,200m、高低差300m、道幅1.2 mの川石敷。中間に立石(記念碑)跡 付近に大芝(休止所)、地蔵堂あり。	イ37号
35	製鉄遺跡	うのや鉱	波佐字宇野屋 イ759	原野	鉄津	イ23号
36	"	宇谷鉱	波佐字鷺谷イ990	山林	鉄津	イ48号
37	"	柄下鍛冶屋跡	波佐字柄下奥 イ943第2	水田		イ47号
38	"	柄下I鉱	波佐字柄下奥 イ948第4	原野	鉄津多数。金池あり	イ47号
39	"	柄下II鉱	波佐字柄下奥 イ948第2	水田	鉄津。金池あり	イ47号
40	"	柄下III鉱	波佐字日ノ平奥 イ1297	水田		イ47号
41	"	ウナギ測鉱	波佐字鉱原 イ1015	山林	鉄津	イ50号
42	"	米ル実鉱	波佐字米ル尖 イ1018	山林	鉄津	イ50号
43	"	飯ノ山鉱	波佐字飯ノ山 イ1020	原野	鉄津	イ50号
44	"	打尾谷鉱	波佐字字津尾谷中 イ1039	山林	鉄津	イ51号
45	"	鍋池II鉱	波佐字新屋田平 イ1316	山林	鉄津	イ53号
46	"	鍋池I鉱	波佐字泊小屋塙ヨリ西半 宇津尾谷南イ1319	原野	鉄津	イ52号
47	"	泊小屋鉱穴	波佐字泊小屋塙奥 イ1318	原野 (牧場)	鉄穴水跡。鉄穴縫隙あり。	イ53号

番号	種別	遺跡名	所在地	現況 (地目)	遺跡の概況 (遺構、遺物)	切図番号
48	製鉄遺跡	鍋窯Ⅲ新	波佐宇鍋窯泊小屋 東平	原野	鉄滓多数。弘化3年(1846年)開設。 金屋子神社あり。	イ53号
49	"	表谷鉄穴	長田字大井谷奥山 ロ261	山林	鉄穴水路跡	ロ11号 ロ12号
50	その他	八幡岩遺跡	長田字八幡戸ロ260	原野	石室様の構造物あり。巨石集石群。	ロ10号
51	製鉄遺跡	表谷炉	長田字カジヤ床 ロ86	原野	寛永11年(1634年)開設。 鉄滓	ロ13号
52	"	丸追鉄穴	長田字丸追谷山 ロ286	原野	鉄穴水路跡	ロ23号
53	寺院跡	恵日山 本覚寺跡	長田字上引寺 ロ58	水田	正平年中(1346-1370年)南北朝敵 佐谷の合戦で焼失。	ロ7号
54	城跡	水見城跡	長田字丸追山ロ287	山林	波佐一本松城との関連をもつ城郭。	ロ24号
55	古墓	千年比丘 遺跡	長田字中山	丘陵地 山林	丘陵地の中央に方形状3mの川石積 の跡塚あり。	ロ22号 イ41号
56	遺物散布地	長田郷遺跡	長田字鉄穴池 ロ173内3他	水田	織文土器、弥生土器、上師器、須恵 器、石斧、石鏃	ロ23号 ロ24号
57	"	城ノ前遺跡	長田字城ノ前 ロ101他	水田	土師器、須恵器、青磁(中国岸)	ロ25号 ロ27号
58	その他	田面庄屋跡	長田字田屋ロ228	水田	明暦2年(1656年)に波佐村が2分 され東谷村に田屋住屋を新設(田中 太郎兵衛守度)。 享保元年(1716年)再び合併のため 閉鎖。	ロ28号
59	製鉄遺跡	堂ヶ原炉	長田字堂ヶ原 イ42	宅地	宝曆12年(1762年)開設。	イ3号
60	寺院跡	正古庵跡	長田字正古庵 イ60	国道	消滅	イ6号
61	製鉄遺跡	正古庵鉄穴	長田字鉄穴塚 イ395	山林	鉄穴水路跡	
62	城跡	長田城跡	長田字岡イ69	山林	解ヶ迫城、岡城ともいう。	イ7号
63	製鉄遺跡	ダアダラ新	長田字鋤町イ106	山林	鉄滓	イ11号
64	その他	傍示四平 土黒	長田字傍示西平 イ467	山林	県境界に約1kmにわたり遺存。	
65	製鉄遺跡	大湊鉄穴	長田字牛岩平 イ452	山林	鉄穴水路跡。通称坊半鉄穴ともいう。	イ26号
66	"	吹ヶ追新	長田字吹ヶ追 イ263	原野	鉄滓	
67	寺院跡	寺田庵跡	長田字寺田イ270	水田		イ33号
68	製鉄遺跡	トヤゴウ 鉄穴	長田字鳥屋郷イ467	山林	鉄穴水路跡	イ30号
69	"	勝示炉	長田字勝示西平 イ467-1	原野	天正元年(1573年)開設。勝示夏燒 新ともいう。	イ30号



波佐一本松城跡・長田郷遺跡航空写真

1. 波佐一本松城調査概報

(1) 波佐一本松城の特徴

一本松城は特異な縄張りの山城である。この城の特徴の第1点は、畝状の空堀が多く、また複雑なことである。第2点は、曲輪が狭少で閉鎖的な縄張りになっている点である。第3点は、大井谷に発する長い水路の終着点に位置している点である。そして第4点は、交通の要衝を抑える優れた立地である。

まず畝状の空堀群について。これは新潟県の伊藤正一氏が畝形阻塞（又は阻障）と呼んで紹介してから研究者間に注目され、今日全国で約250城で確認されている。年代は戦国期後半が多い。中でもこの一本松城のものは独自性があり、問題をはらんでいる。東南側山腹の6～12のような行儀よく並ぶ形が一般的であるが、尾根の鞍部に乗り上げて乱れている形にこの城の畝の特徴がある。島根県の畝状空堀群は他に、広瀬の勝山城、大森の山吹城、周布の鳶ノ巣城、三隅の高城と鐘ノ尾城、井村城、益田の七尾城と角井城などにみられる。最も整った形は勝山城で、毛利氏が尼子氏の富田月山城を攻めるために築いた陣城である。周布・三隅地方の諸城のものは扇形に配列されているが、いずれも山腹に等間隔に並んでいる。波佐一本松城ほどの乱脈ぶりは全国的にみても珍らしい。ただ気まぐれに掘って乱雜になったはずはないから、この配列の意味を解くことができれば、畝状空堀群全般の性格究明に貢献できるはずである。

この城の空堀群は、途中で枝分れしているため数え方に異同は生じるが、東南側山腹に20本、西北側山腹に9本の堅堀が並んでいる。（下端を山腹に開口しているものだけを数えた場合である。）このうち東南側の3と西北側の4、同じく5と5、13と8、15と10は一続きのもの、1と1も元は続いていた可能性がある。（以下同様に続くものを3～4の如く表記することにする。）

このように両側の山腹へ続いているものは、尾根上にある部分を中心みて堀切と評価するケースが多く、連続している場合でも二重堀・三重堀などと呼び（青森県の元城は五重堀）、畝状空堀群と区別されている。しかし一本松城の上記の諸例は、山腹だけに設けられている6から12までのものと連接して、まとまって一つの機能を發揮しているとみられるし、各1本1本の規模は小さく、堀切のような強い遮断性をもつものではないので、畝状空堀群の中に数えるべきである。高知県の針木城、岡本城

でも五重の堀切が山腹の畝状空堀群と連接していて一体的に機能しているが、いかにも堀切らしくすっぽり尾根を切っている。一本松城のものは尾根を断ち切る堀切の本来の姿からは遠い。ただ19だけは堀切というべきものであって、他と区別しておいた方がよい。また、13-8は底巾が広く、通路や武者溜り（あるいは武者隠し）を兼ねているようである。3-4もこれに準ずる形である。壁に落ちている部分についても西側の1と2、特に1は長さが傑出して城域を画する特殊な働きをしていたようなので、これまた他と区別しておいた方がよい。

要するに、19は堀切、13-8と3-4は武者溜りを兼ねる点で他と区別されるもの、西側山腹の1と2は単独で機能しうる堅堀である。このことを城の縄張りの中に位置づけると、こうなる。19はⅢの前面を防禦する。13-8はⅡの側からⅢの方に向って射撃する陣地、3-4はⅠの側からⅡの方に向って射撃する陣地となる。詳細な実測図の作成はこの際非常に有力な資料となる。13-8の堀底の土橋状の地点は標高445.4m、16と10の間の土橋状の地点も同じ445.4mである。ところが3-4の堀底の最高所は449m、その前面の土壙状の高まりは449.5mであるのに対して、5-5の堀底は444.8mである。3-4から5-5に向ってかなりの比高差のあることがわかる。つまり、Ⅱの側からⅠの方に対して射撃する際、5-5の堀底は武者溜りとしては機能しないことがわかる。逆に3-4の方はⅠの側からⅡの側に対する射撃の陣になりうる。このことは、この城の特徴の第2点との関わりで重大な問題を投げかける。

中世城郭は曲輪すなわち陣地として削平された平場を主体にして構成される。一本松城の曲輪はどうであろうか。Ⅱはしっかり削平されているので、問題なく曲輪であり、いわゆる主郭というものに相当する。近世風に表現すると本丸である。この主郭Ⅱが畝状空堀群の中に閉じこめられたように位置づけられ近寄りにくい点がこの城の縄張りの大きな特徴である。Ⅰは削平されているが、縁辺は不明瞭で曲輪としての普請は不十分である。面積も著しく狭い。しかし標高はⅠの最高所453.8mに対して455.85mとわずかに高い。Ⅲは北半分は平坦だが、堀切19に接する面以外は切岸が不明瞭で緩傾斜し、南半分は、畝状空堀群の続きたまではいかないが、掘り窪められており、曲輪としての機能を犠牲にして障壁としての役割を負わされている。Ⅳは殆んど削平されていない。前面の防禦も全く考慮されていない。いわば捨て曲輪や臨時の駐屯地として使われることはあっても、陣地を構える場所ではない。

この城は東谷と西谷の合流点、波佐の中樞部に向って突き出した尾根の最初のピークにあり、IVの東北は合流点へ向って緩やかに下降する。巨視的にみると、防御正面（大手

道の方向とは必ずしも一致しない)はこの東北方面に想定される。IIから見て前方にIIIとIVがある。普通ならIはIIの後方を守る備えである。ところが前述したように、IIの後の畝状空堀群はIに向って順次高まり、3-4が武者溜りとして有効に働いているし、Iの方がIIより高いので、Iの方がIIより内になる。IV・III・II・Iの順に外から内へ配置されていることになる。これはIIを主郭(すなわち内郭)とする見方と矛盾する。図示したI・II・III・IVの範囲内でこの城を見ている限り、この矛盾は解消しないようである。また、この範囲内で完結する城にしては、畝状空堀群の占める比重は余りにも高すぎる。

以上のようにみると、この城は南、後方の現キャンプ場の高地、あるいはさらに後方の水見城等を含めて、広域に考察しないと説明がつかない。残念ながら現キャンプ場等の後方高地との繩張り面でのまとまりは把握できない。しかし最近隅田正三氏等地元の研究者の努力で、長田遺跡附近から山腹を迂回して一本松城南方に至る山道沿いに、大きな切通しなどの城郭関連遺構が発見されつつある。また特徴の第3点、長い水路との関連も重要である。この水路が鉄穴流し等でなく城の水の手のものであるとすると、狹少な曲輪の城に分不相応な施設がなぜ必要なのか不可解であった。しかし南の後背地に兵力を駐屯させる場所があり、図示した範囲はその前線基地にすぎないとすると、諸々の難問が解きやすくなる。正解はいずれになるか、まだ予断を許さぬが、少くとも城域と繩張りの確定に課題をなげかける特異な城郭であることだけはたしかである。

かなりの大軍が臨時に駐屯する。その前線をかためる要塞がI~IV地区だという仮定は、第4の特徴である交通の要衝という問題と照應してくる。波佐地区だけの域でなく、石見、安芸両国を結ぶ交通の要衝を押えて進出しようとするいずれかの勢力の繋ぎの城という見方がクローズアップされる。安芸の毛利氏の山陰進攻のルートとしてはやや西にそれているが、山陰経路の主力となった吉川氏の大朝庄と、西石見の雄益田氏の益田郷とのちょうど中間にあるという点は示唆的である。畝状空堀群の一般化すると思われる戦国後半期に、益田氏とその同族三隅、周布、永安、福屋氏や吉川氏が、大内、毛利、尼子等の興亡との関連でこの附近でどのような動きを見せたのかを仔細に検討しながら考える必要があろう。

(村田修三)

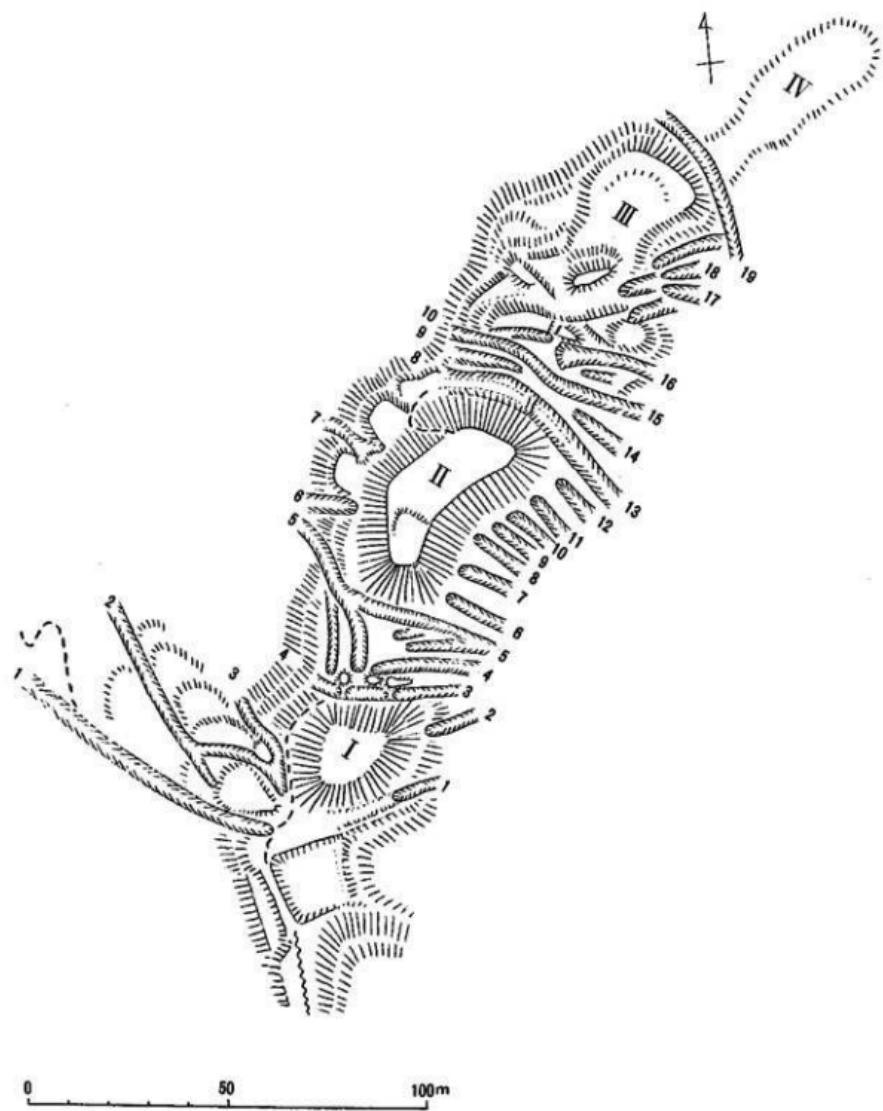


图3 波佐一本松城略图

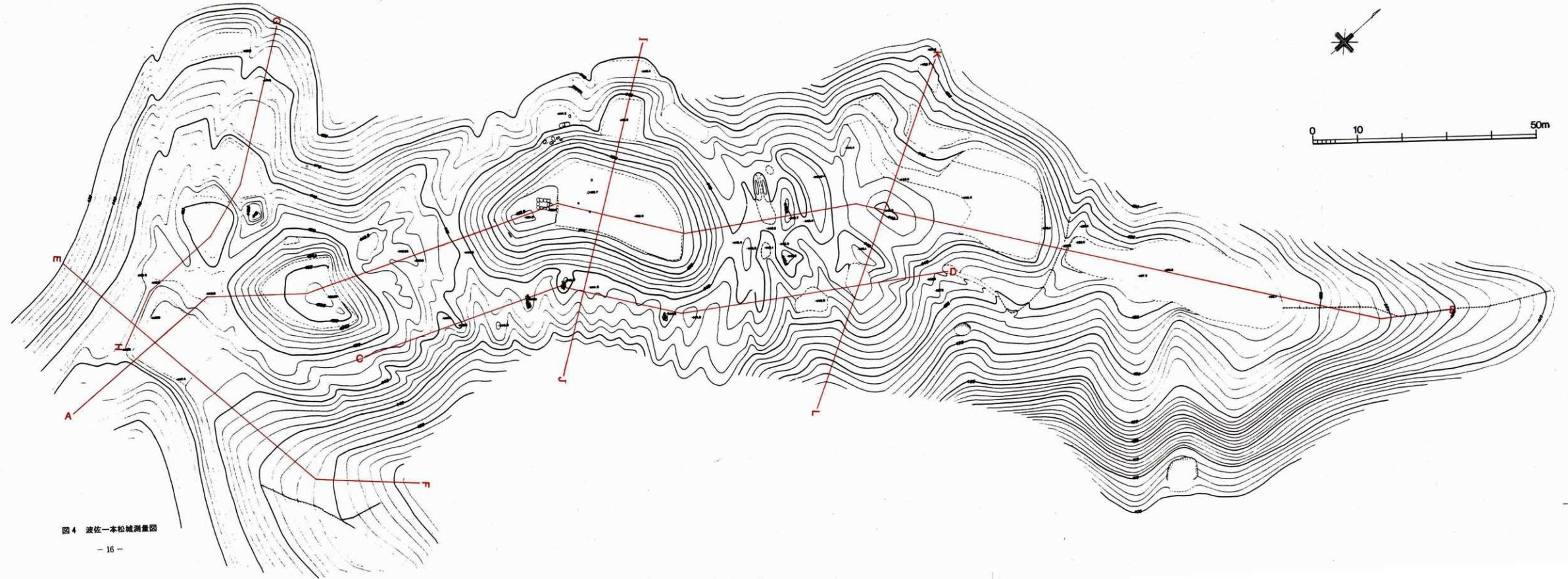


図4 波佐一本松城測量図

- 16 -

- 17 ~ 19 -

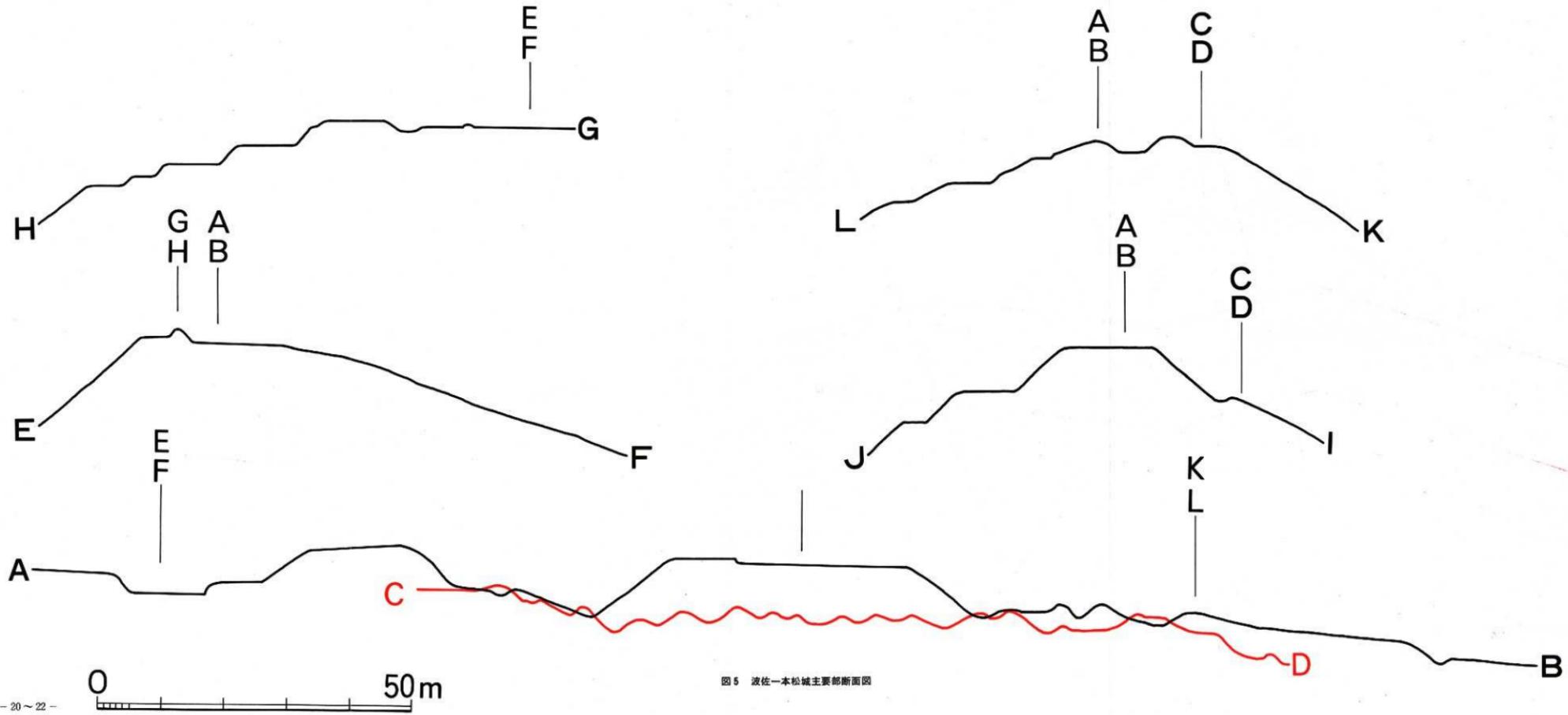


図5 波佐一本松城主要部断面図

2. 長田郷遺跡調査概報

長田郷遺跡は金城町大字長田郷に分布する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。長田川が周布川に合流する地点に築造された波佐一本松城跡の東側の水田地帯にあり、昭和60年10月に実施された圃場整備事業で多量の土器が出土したことにより発見された。遺物の出土が確認されたとき、工事はほとんど終了しており、遺構面はすでに削平されていたが工事を一時中断して、遺物の採集をおこない、併せて一部分断面に現われた土層の状態を記録した。遺物の採集は、便宜上工事地区を1~12区に分けておこなった。

土層が確認できたのは、7と11区の一角で、図7のとおりである。11区のa-bは、地山がV字状に近く凹んでおり、中央部に1m幅の遺物包含層があり、木片に混って、土師器や須恵器片および土鍤が認められる。7区のc-eには、遺物包含層が二層存在する。上層は80cmと厚く、弥生時代以降の遺物が多く含まれるが、下層は30cm前後と薄く、遺物も縄文土器と石器に限られた。

遺物には土器・石器および自然遺物の種子があり、コンテナー30箱程が出土している。

土器には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器がある。縄文土器(図8)はコンテナー2箱分で、鉢の細片が多い。時期は後・晩期に属し、後期のものとしては、磨り消し縄文(図8-2~6、16)と沈線文(7、17)が、晩期では沈線文(8)、貼付凸帶文(9、10、12)、刻目文(11)のものがあり、磨研(13)を施したものもある。また、内外面とも粗面のものも多く含む。

弥生土器はコンテナー2箱がある。壺(図9、図10-1~12)が多く、大形品も含まれる。時期は後期で、口縁部が内傾し短いものと外傾し長いものとがあり、時期差が認められる。技法や文様としては、口縁部に凹線をもち、肩部に櫛状工具による波状文、平行沈線文、菱形文が施されるものと、口縁部に櫛状工具による平行沈線文を施したものと無文のものとがある。

土師器はコンテナー8箱あるが、細片が多く、形が知れるものは少ない。図10-13は、壺の口縁部で5の字状を呈し、文様はなく、いわゆる古式土師器に属する。

須恵器の量は少ない。器種としては壺、壺、鉢、壺があり、奈良時代から中世までのものが含まれる。

土師質土器(図10-17)は極めて少なく高台を有す壺が数個出土している。

陶磁器は江戸時代以降のものが多いが、それ以前のものは青磁窯の破片(図10-19)1片のみである。外面には中線に稜をもつ素弁連花文が表わされており、全面に濃緑色の青磁釉がかかる。中国産で、13世紀頃のものである。なお、他の焼物としては、土鍤が6個発見された。

石器としては、石鐵・石鍤などが数点出土している。石鐵は安山岩系のもの、黒曜石はまったく含まない。石鍤は川石の二方を打ち欠いた簡単なものである。

(隅田正三 西尾克己 柳浦俊一)

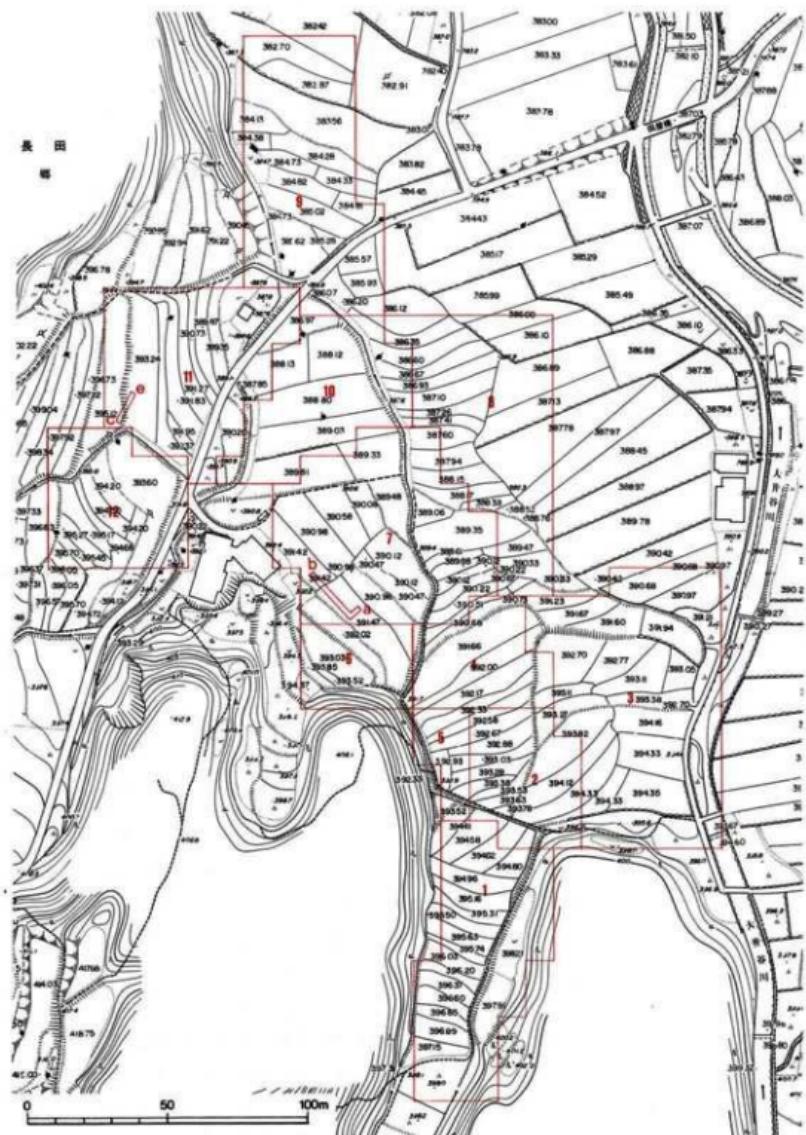
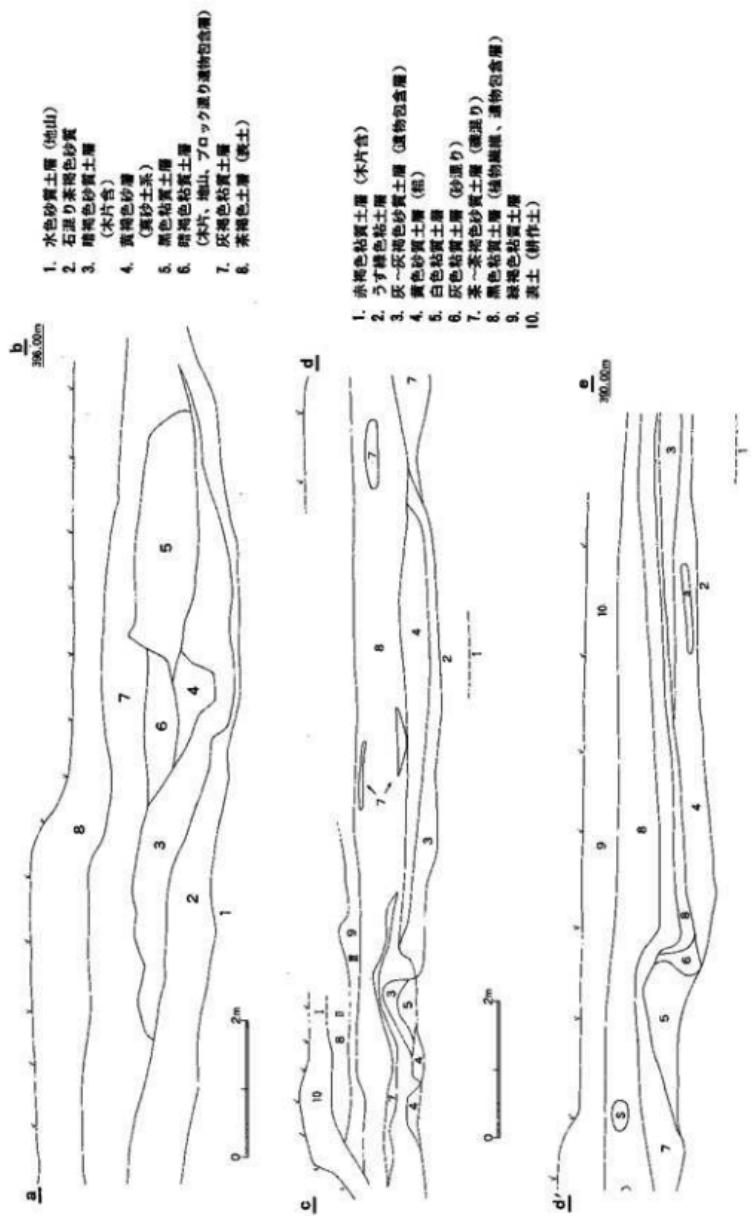


図6 長田郷遺跡区域図 (a-b、c-eは図7の断面位置を示す)

(原図は町内は場整備事業現況平面図 (1/1000) を縮小したものである)

図7 長田郷遺跡断面図



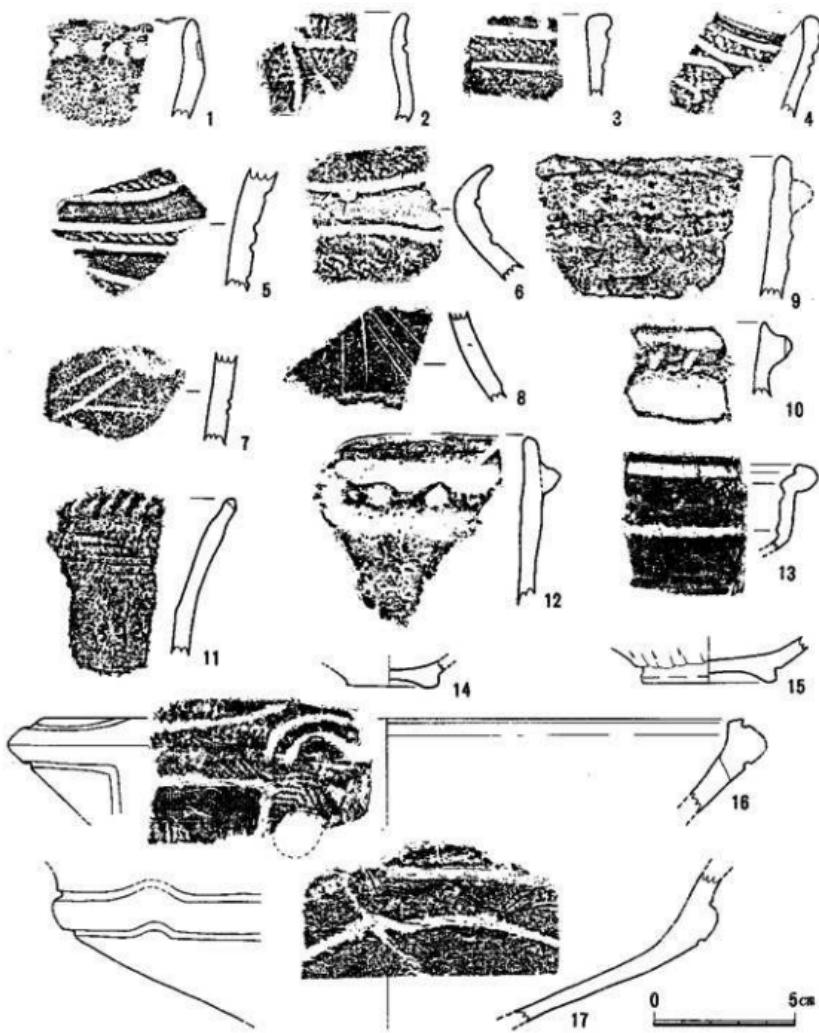


図 8 長田寺遺跡出土縄文土器実測図

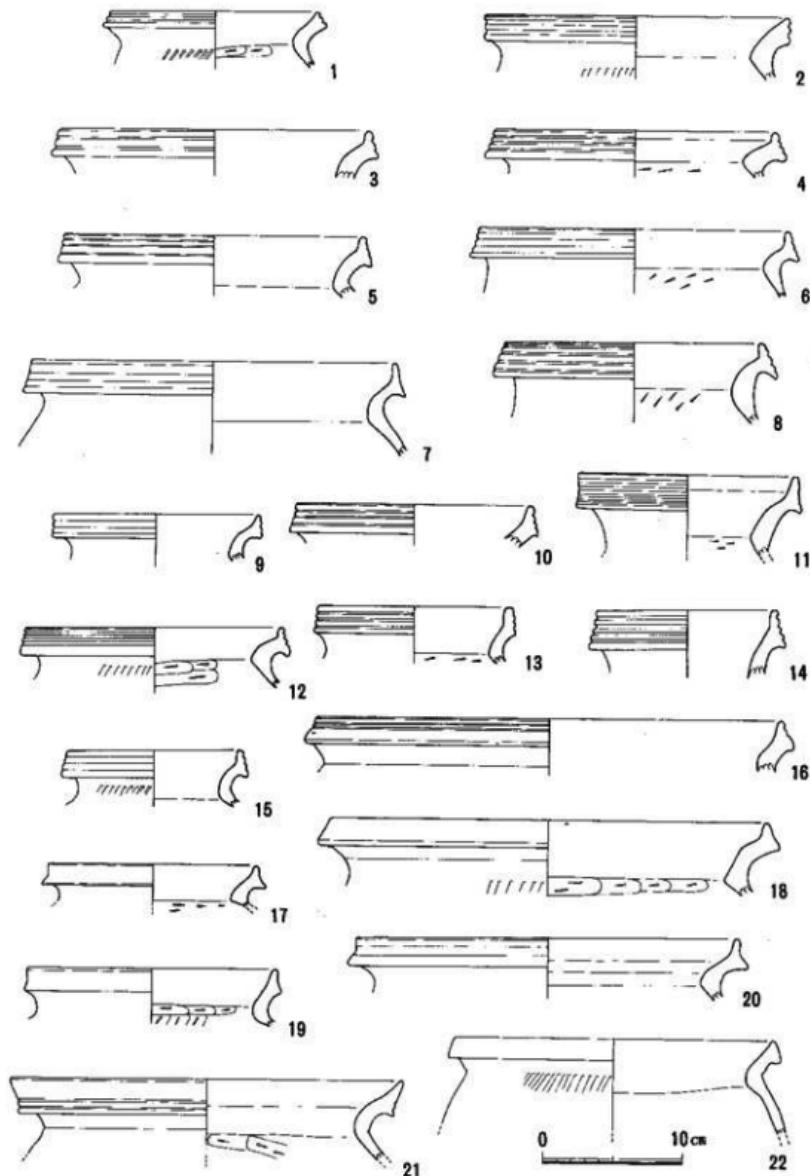


図9 長田郷遺跡出土弥生土器実測図

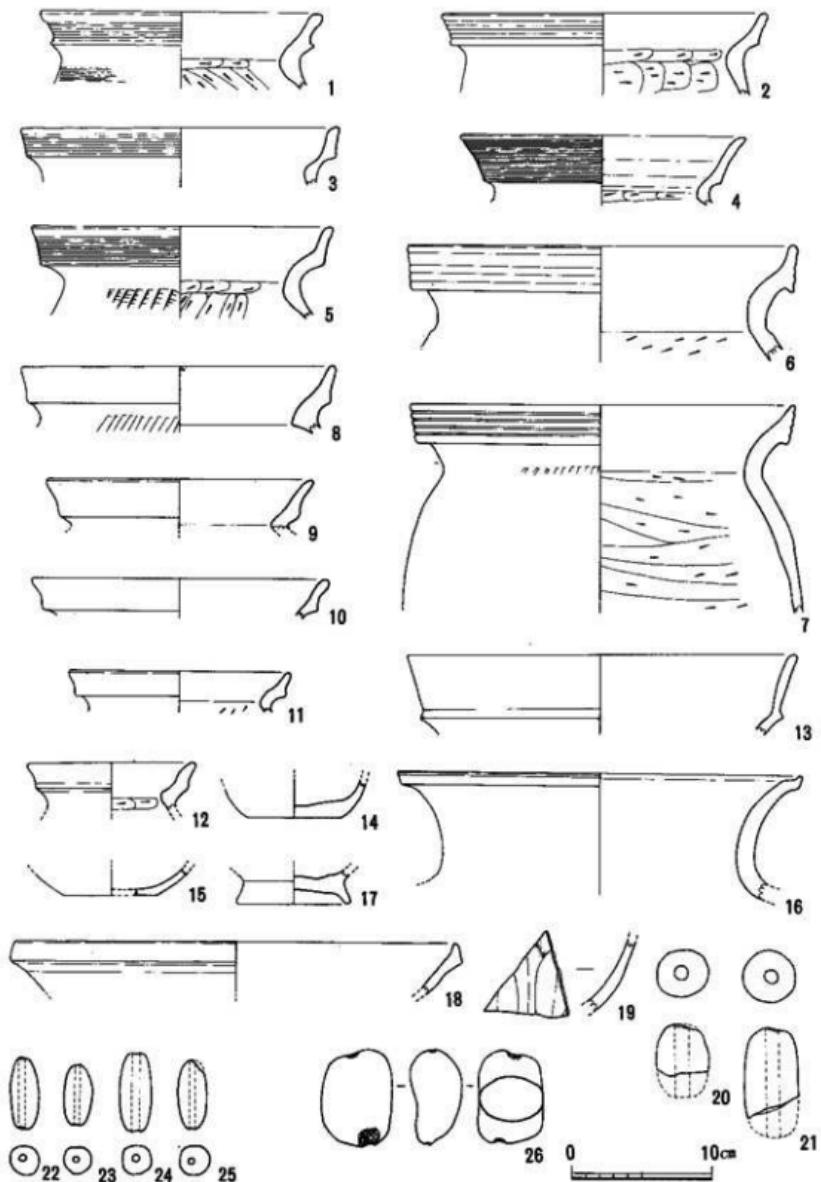


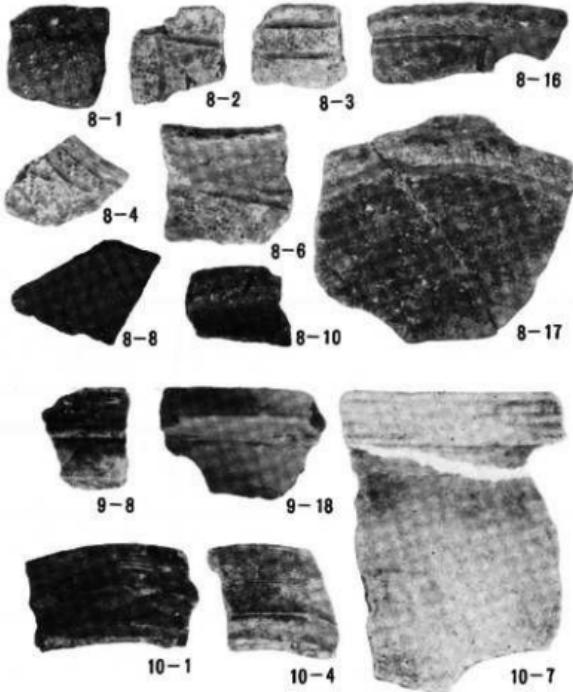
図10 長田郷遺跡出土土器・陶磁器・石器・土縫実測図

表2 長田郷遺跡出土土器一覧表

番号	器種	時 期	文様、調査	法 量	胎 土	燒 成	色 調	備 考
8-1	鉢	縄文後期	口縁部近くに魚貝の刺突文、口端部に崩壊印文		0.5~1mmの大砂粒を多く含む	不 燒	茶褐色	
8-2	鉢	縄文後期	太い沈線文 崩壊印文		0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	茶褐色	
8-3	鉢	縄文後期	太い沈線文 崩壊印文		0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	茶褐色	
8-4	鉢	縄文後期	太い沈線文 崩壊印文		0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	茶褐色	波状口縁か
8-5	鉢	縄文後期	太い沈線文 崩壊印文		0.5~2mmの大砂粒を多く含む	良 好	暗褐色	
8-6	鉢	縄文後期	太い沈線文 崩壊印文		0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	
8-7	鉢	縄文後期	細い沈線文		0.5~1mmの大砂粒を多く含む	良 好	外面茶褐色 内面黒色	
8-8	鉢	縄文後期	細い沈線文 表面研磨		0.5~1mmの大砂粒を多く含む	良 好	外面暗褐色 内面黒色	
8-9	鉢	縄文後期	突帯文		0.5~3mmの大砂粒を多く含む	普通	茶褐色	突帯文は剥離欠損
8-10	鉢	縄文後期	斜口突帯文		0.5~3mmの大砂粒を多く含む	良 好	茶褐色	
8-11	鉢	縄文後期	刻目文 表山系底		0.5~1mmの大砂粒を多く含む	普通	黑色	
8-12	鉢	縄文後期	刻目突帯文		0.5~2mmの大砂粒を多く含む	普通	外面部褐色 内面黒色	
8-13	鉢	縄文後期	全面研磨		1mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	
8-14	鉢	縄文後期		底径 3.3 cm	0.5~1mmの大砂粒を多く含む	良 好	黑色	
8-15	鉢	縄文後期	外面削り様の痕跡	底径 4.5 cm	0.5~1mmの大砂粒を多く含む	良 好	外面部茶褐色 内面黒色	
8-16	鉢	縄文後期	縦帶文、太い沈線文、 崩壊し縦文		0.5~1mmの大砂粒を含む	普通	暗褐色	
8-17	鉢	縄文後期	太い沈線文		1mmの大砂粒を多く含む	良 好	外面部暗褐色 内面黒色	
9-1	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、肩部に横割文文、内面へう割り	口径 14.5 cm	0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	黑色	スヌ付甕
9-2	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、肩部に横割文文、内面へう割り	口径 21.2 cm	0.5~3mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	
9-3	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文	口径 21.7 cm	0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	スヌ付甕
9-4	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、肩部に刺突文、内面へう割り	口径 19.7 cm	0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	
9-5	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、肩部に刺突文、内面へう割り	口径 20.8 cm	0.5~2mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	
9-6	甕	弥生後期	口縁部に4条の凹線文、内面へう割り	口径 21.7 cm	0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	茶褐色	
9-7	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文	口径 26.1 cm	0.5~2mmの大砂粒を含む	良 好	淡茶色	
9-8	甕	弥生後期	口縁部に4条の凹線文、内面へう割り	口径 17.8 cm	0.5~2mmの大砂粒を含む	良 好	暗褐色	
9-9	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文	口径 14.3 cm	0.5~1mmの大砂粒を含む	良 好	茶褐色	
9-10	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文	口径 16.4 cm	0.5~3mmの大砂粒を含む	良 好	黑色	

番号	基種	時期	文様、調整	法量	胎土	焼成	色調	備考
9-11	甕	弥生後期	口縁部に4条の櫛状線文、内面へら削り	口径15.1cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	黒 色	
9-12	甕	弥生後期	口縁部に4条の凹線文、内面へら削り	口径17.8cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	黒 色	
9-13	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、内面へら削り	口径13.2cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	黒 色	
9-14	甕	弥生後期	口縁部に4条の凹線文	口径12.3cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
9-15	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、内面へら削り	口径11.9cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
9-16	甕	弥生後期	口縁部に3条の凹線文、内面へら削り	口径32.7cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
9-17	甕	弥生後期	無文 内面へら削り	口径14.5cm	0.5mm以上の砂粒含む	良 好	茶 色	
9-18	甕	弥生後期	肩部に刺突文 内面へら削り	口径30.7cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
9-19	甕	弥生後期	無文	口径17.4cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	黒 色	
9-20	甕	弥生後期	無文	口径26.8cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
9-21	甕	弥生後期	口縁部に2~3条の凹線文 内面へら削り	口径27.5cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
9-22	甕	弥生後期	肩部に刺突文	口径22.9cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	ス付青
10-1	甕	弥生後期	口縁部に5条の櫛状線文、内面へら削り	口径19.8cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	ス付青
10-2	甕	弥生後期	口縁部に5条の櫛状線文、内面へら削り	口径23cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	ス付青
10-3	甕	弥生後期	口縁部に8条の櫛状線文	口径22.5cm	0.5~2mmの砂粒少し含む	良 好	茶 色	ス付青
10-4	甕	弥生後期	口縁部に26条の櫛状線文、内面へら削り	口径20.1cm	0.5~2mmの砂粒少し含む	良 好	茶 色	
10-5	甕	弥生後期	口縁部に13条の櫛状線文、内面へら削り	口径21.2cm	0.5~1mmの砂粒少し含む	良 好	茶 色	
10-6	甕	弥生後期	口縁部に4条の凹線文、内面へら削り	口径27.5cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
10-7	甕	弥生後期	口縁部に4条の凹線文、内面へら削り	口径27.2cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
10-8	甕	弥生後期	肩部に刺突文	口径22.2cm	0.5~3mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
10-9	甕	弥生後期	無文	口径18.9cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	茶 色	
10-10	甕	弥生後期	無文	口径23cm	0.5~2mmの砂粒含む	良 好	茶 色	
10-11	甕	弥生後期	無文、内面へら削り	口径15.7cm	0.5~1mmの砂粒多く含む	良 好	黒 色	
10-12	甕	弥生後期	無文、内面へら削り	口径11.8cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	茶褐色	
10-13	甕	古墳前期	無文	口径27.5cm	0.5~1mmの砂粒含む	良 好	赤褐色	
10-14	环	余良~平安(漢唐)	ヘラ切り	底径 6.5cm	1~2mmの砂粒 少し含む	やや不良	灰 色	
10-15	环	中世(?) (宋唐)	回転糸切り	底径 6.6cm	ほとんど砂粒含まない	良 好	赤褐色	
10-16	环	奈良~平安(漢唐)		口径 26.6cm		良 好	灰色	
10-17	环	中世(?) (土器)	回転糸切り	底径 8.1cm	2~3mmの砂粒 少し含む	良 好	茶 色	

番号	器種	時 期	文様、調整	法 量	胎 土	燒 成	色 調	備 考
10-18	鉢?	中世(?) (須恵)		口径31.2 cm	小砂粒含む	良 好	黒 色	
10-19	青磁 錐 直	漢代			青灰色を呈す	良 好	黄 緑 色	
10-20	土錐			腹存長 3.5 cm	砂粒少し含む		淡 灰 色	
10-21	土錐			腹存長 6.5 cm	1~3 mmの砂粒 含む		茶 色	
10-22	土錐			長 5.2 cm	砂粒少し含む		淡 灰 色	
10-23	土錐			長 4.4 cm	砂粒少し含む	良 好	灰 色	
10-24	土錐			長 5.5 cm	0.5~1 mmの砂 粒含む	良 好	茶 紫 色	
10-25	土錐			長 4.9 cm	0.5~3 mmの砂 粒含む	良 好	灰 紫 色	
10-26	石錐			長 6.9 cm				



長田郷遺跡出土縄文土器（上段）、弥生土器（下段）

結語

従来、金城町波佐・長田地区には29件の遺跡が知られていたが、本年度の分布調査の結果、新たに40件が確認され、総数69件となった。特に、長田郷遺跡の発見は、この地方における縄文時代から中世紀にかけての記述で裏付されていない生きた証しを得ることができた。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、青磁（中国陶磁）、石鎚、剥片石器、磨石、石斧、石錘、凹石、敲石、堅果類（ヤマモモ、クルミ）など約4,000点の遺物の中から一部を抽出して本書に掲載した。

このたびの調査地区内に30箇所の鉢跡があった背景は、中国山地の良質な真砂砂鉄、豊富な木炭資源、水量に恵まれ、自然の立地条件を満していることに立脚している。

平安時代「長田別府」、鎌倉時代「長田保」、南北朝時代「波佐庄」として莊園であったことは黒鉄（たたら鉄）に起因している。

こうした環境の中で、波佐一本松城の役割りは重要であったと考察される。

城郭の南南東の大手方向にあたる小字城ノ前から中世の土器や中国産の青磁の破片が出土したことから、一本松城に係る豪族の館が城ノ前付近にあったことが推定される。

波佐一本松城跡の測量は城郭の主要部にとどまったが、城郭の縄張りについては陰陽五行説によって築城されたものとして今後の研究課題が残されており、また「水の手」が約3km、城郭の南北1km、東西400mの範囲に所在するため、測量・調査は近い将来総合的に実施する必要がある。

千年比丘遺跡は独立した南北に300mの小高い丘陵地の中央部に存在する。内部構造は未発掘のため不明であるが、川原石で方形状に二段積みにされた経塚である。なお、この丘陵には他に円墳状のマウンドも數箇所認められ、併せて今後の詳細な調査に期待したい。

このように、波佐・長田地区では、長田郷遺跡のような貴重な遺跡が確認され、また、一本松城跡などについてその実態がくわしく調査された。その内容をまとめたこの報告書が、今後の文化財保存、活用に広く利用されることを希望する。

（上田房一、隅田正三、岡本利道）



金城町長田地区全景

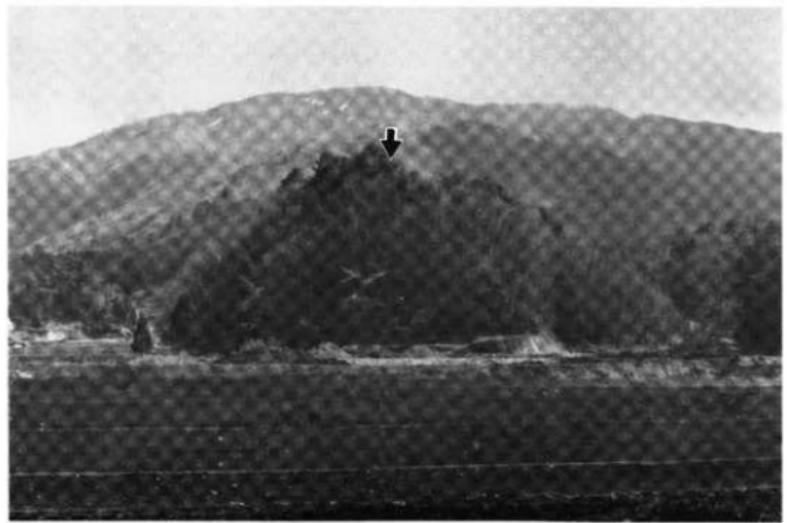
矢印は波佐一本松城跡を示す（南から）



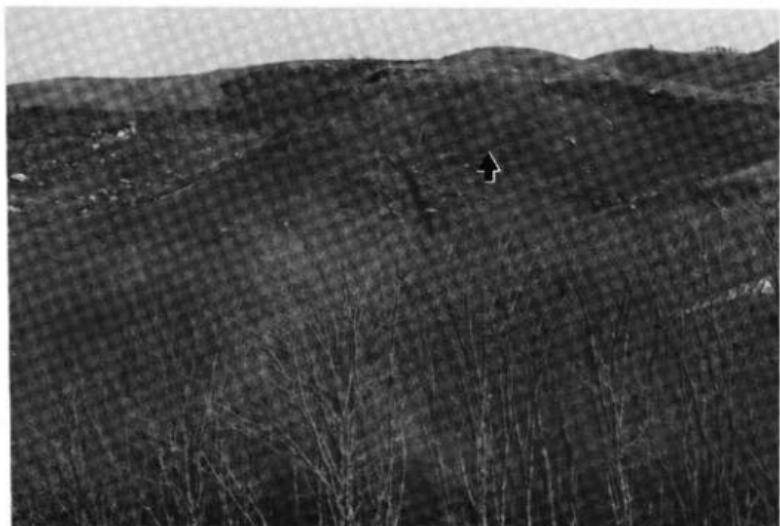
長田郷遺跡全景（東から）



アンの木前遺跡（北東から）



千年比丘遺跡（北から）



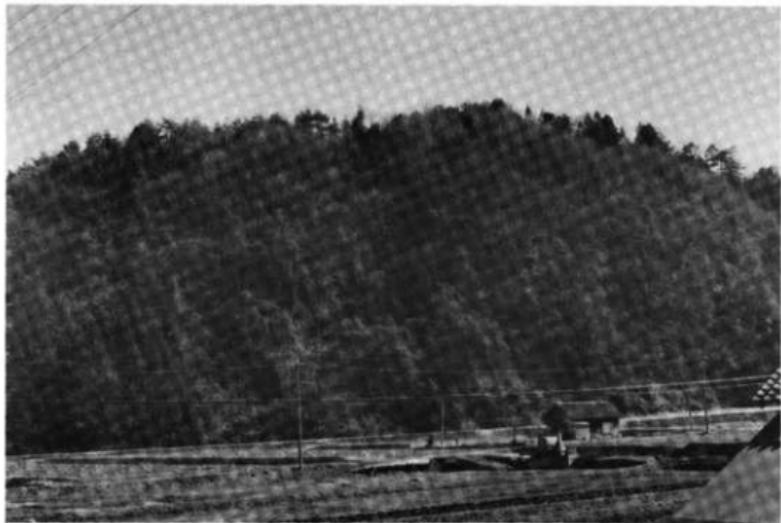
泊小屋鉄穴水路跡（西から）



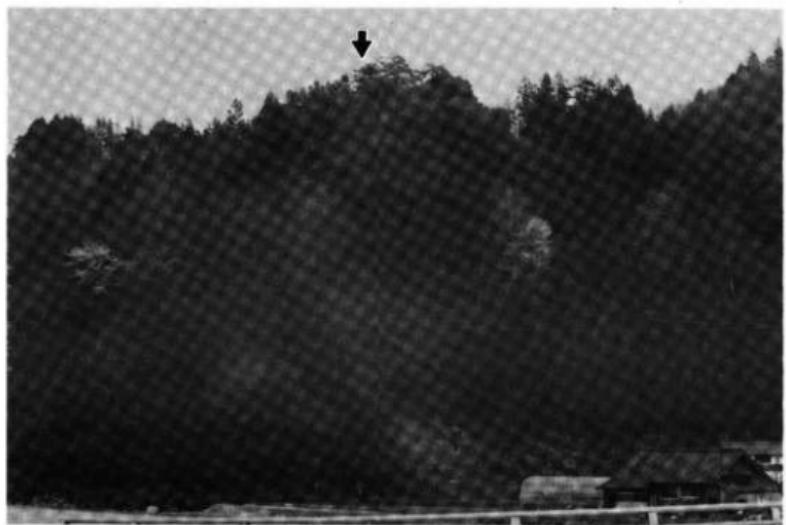
鍋滝Ⅲ鉛跡
杉の樹と金屋子神社（南から）



波佐一本松城跡（北から）



波佐一本松城跡（西から）



波佐一本松城跡（南西から）



水見城跡（北東から）



波佐一本松城跡から花城跡を望む（南西から）



花城跡（北から）

島根県那賀郡金城町内
遺跡分布調査報告書 I

—波佐・長田地区—

昭和61年3月25日

発行 島根県那賀郡金城町
大字下米原171
金城町教育委員会

印刷 松江市母衣町89
御谷口印刷